『西南アジア研究』No. 71, 2009

『エヌーマ・エリシュの注釈書』（マルドゥクの「50の名前」への注釈）概観

松　島　英　子

は　じ　め　に

先般私は「二言語併用世界の文字トリック ――『エヌーマ・エリシュ』の注釈書：マルドゥクの「50の名前」を例に ――」と題して小論を発表した［松島 2009］[1]。またそれにやや先立って，別途「マルドゥクの「50の名前」の意味について」と題する小論も執筆した［松島 2008］。このようにいささかの期間「マルドゥクの50の名前」とそれに関する注釈にこだわっていたのは，これらの論考を作成する過程において，バビロニアの文字文化を特徴づけるいくつかの様相が浮かび上がり，それらがきわめて興味深い面を持つことが分ったからである[2]。

『エヌーマ・エリシュ』におけるマルドゥクの「50の名前」と，それについての『注釈書』の存在，そして『注釈書』が用いている注釈の方式は，やや唐突な比較ながら昨今の日本で流行している「漢字クイズ」に似たところがある。もちろん，文字を使ったクイズは今に始まったことではない。二つの文字体系を使い分けている日本人の間では，漢字の形の全部または一部を利用し，漢字と仮名の音を様々に絡ませ，知識の量やインスピレーションの優劣を競い戯れることは，よく行われてきた。古くは『源氏物語』のなかに「偏つむぎ」遊びについての言及がある[3]。

これは日本だけに見られる現象ではない。ある言語の表記に，別の言語の文字体系を借用した場合，いわゆる「音読み」「訓読み」問題は常についてまわる[4]。また，「重箱読み」「湯桶読み」のような更にややこしい問題も出てくる。それは遠く離れた世界であるバビロ

1）なお，この前川編集の報告書［前川（編）2009］には，本稿の内容と直接間接にかかわる，あるいは着眼点を多少とも共有する，いくつかの論考が含まれている［池田 2009；前川 2009］。

2）このような問題にとりわけ関心を抱くようになった契機は，Bottéro 1977を読んだことにある。今から30年以上前に執筆された論文ながら，そこで提示された問題の意義は今日なお大きなものがある。

3）『源氏物語』葵の巻：山岸徳平校注『源氏物語』（一），岩波書店，432頁。

4）例えばアッカド語テクストのなかにシュメール語が「引用」されている場合，これをどう発音したのか，すでに様々な議論がある。Sanders 2005では複数の研究者がこのことを論じている。

ニアにも存在していた。バビロニアでは「注釈」という文芸のジャンルが成立し，多数の書物が編まれた。その背景には文字についての高度な知識，われわれの文字遊びに通じる知的関心と遊び心，それらが絡み合った複雑な頭脳作用があった[5)]。

有名なマルドゥクの「50の名前」とそれについての『注釈書』は，そうした事柄を垣間見るための資料のごく一部に過ぎない。問題は，事柄がたんなる好事家の遊戯にとどまったのではなく，広く様々な場面に影響を及ぼしたことである。『エヌーマ・エリシュ』という作品それ自体が，文字（特に数字）を利用した巧妙なテクニックの上に成立しており，主題のアピールに利用され，効果を生んでいる［松島 2008］。文字を利用したトリック的発想法は，社会的，政治的場面にも及んだ[6)]。二言語併用，あるいは複数言語併用の世界は，メソポタミア世界全体に，さまざまなインスピレーションを注ぎ込んだと思われる。

前置きが長くなったが，本稿は冒頭に挙げた二点の小論，特に松島 2009 のいわば続編である。先の論では，問題となる『マルドゥクの 50 の名前の注釈書』（以下『注釈書』と略記）に出ている注釈例の一部のみを扱った。理由の一つは紙幅の都合だが，もう一つの理由は，この書物が適用している注釈の方式のステレオタイプを提示してみたいと考えたからである。本稿では，先の論で割愛した注釈を一通り取り上げ，紹介・分析する。現存の『注釈書』は欠損部も大きく，「50 の名前」のすべてをカバーしていないが，現存テクストのみを扱う。本稿はいわば私のノートを転記した形になる。論としてのまとまりには欠けるかもしれない。しかし『注釈書』の著者が用いる文字トリックは実に多彩・巧妙である。その様子をまとめて一瞥してみてもよいのではないか，そして，文字をめぐって人々が高い知的営みを行っていた事実を改めてたどり，その意義を考えてみてもよいのではないか，そう思ってこのような構成にした。

『注 釈 書』

すでに松島 2009 において，『注釈書』の概要は述べた。ここでは繰り返しを避け，以下のテクストから成り立っていることのみを記すこととする。

5） 2009 年 5 月 9 － 10 日の第 52 回シュメール研究会（於早稲田大学）で春田晴郎氏（東海大学）が行った発表「表音表記の訓読み：パルティア語アラム語詞とヒッタイト語アッカド語詞の比較」は，この観点から非常に興味深かった。同氏の発表内容が早い時期に論考になることを切望している。なお，Houston 2004 でも，随所で関連する問題が論議されている。

6） エサルハッドン（681－669 BC.）が，父センナケリブが破壊したバビロンの町とエサギルの再建に着手したしたとき，その口実として，「マルドゥクは 70 年町を見捨てるつもりであったが，心を和ませ数字を入れ替えて 11 と書き換え，バビロンに戻る決意をした」と説明したのは，楔形文字の表記法を利用した巧妙な方便である［Borger 1956: 15 § 11; Frame 1992: 67－68 and notes 17－18］。

（A）　*STC* II，51，52，53，54，55＋*CT* 19，6＋*RA* 17（1920），169

（B）　*STC* II，56－58，59，60

これは『エヌーマ・エリシュ』の「50の名前」のうち，第10番目以降の名前を対象とした書物である。ほかにもシッパル出土の文書に未発表の注釈書断片が含まれているそうだが，「50の名前」に関わるものかどうか未確認である［*Catalogue* 1987：182（82－9－18, 6599）；*Catalogue* 1988：52（AH 83－1－18, 1427＋1570）］。

さて松島2009で割愛した注釈と，その説明の根拠と私が理解した「理屈」を以下に提示する。とりあえずは『エヌーマ・エリシュ』（以降は*Ee*と略記する）における「50の名前」に対応させつつ，順に注釈を列挙する。まず*Ee*の「50の名前」の部分の文章を記載し（本稿で扱う箇所はすべてタブレットVIIにあるので，文章の前にはVIIを略し行数のみを（　）で示す[7]。文末に記した数字は，マルドゥクの「何番目の名」なのか示すものである），次に『注釈書』の記述を翻字で示し，その後「コメント」として私が理解する注釈の根拠を提示する。なお，記述が煩雑になるのを避けるため，次のような略式の表記を行う。

① A→Bは「AからBが導かれる」を意味する。

② ＝は，文字の形が同じであること，またはシュメール文字とアッカド語の語彙が同定関係であることを意味する。

③ （　）内は導入や同定の理由説明である。

なお，シュメール文字とアッカド語彙の対応関係がDINGIR＝*ilu*のように周知のものであるときには，特にコメントをくわえない。それでは列挙を始めるが，既発表の稿に含まれているものは省略しVII 18以降を検討する。

(18)　*a-a im-ma-ši i-na a-pa-a-ti ep-še-ta-*[*šu li-kil-la*]

「彼のお方が人々の集団の中で忘れられることなく，人々がその偉業を心に銘記するように！」

これは（15）に現れる14番目の名 ^{d}TU.TU.ZI.UKKIN.NAに続く文章である。これについて『注釈書』は次のように説明する。

STC II 51 ii（Sm. 11＋Sm. 980）＋// *STC* II 59（K. 2053）o. 4'－7'

2　TA　*a*-[*a*]

3　TU$_9$/ZÌ　*m*[*a-šu-u*]

4　TA　*i*!?-[*na*?]

5　UKKIN　*a-p*[*a-a-tu*]

7）本稿で引用する*Ee*のテクストは原則としてTalon 2005を使用する。

6 TU_4 *ep-še-tu*

7 DU_8 *ku-u*[*l-lu*]

「コメント」

2 については TU の母音を無視し TA と置き換えたことはわかるが，*aja* に結びつく根拠は不明。

3 については ZI＝MIN（＝*ma-šu-u*）*šá til-pa-ti* ... A III/1 Com. B 22（*CAD* M/I 398 a）などとあることから，ZÌ→ZI とこじつけたことが考えられる。

5 については多分 UKKIN＝*puhru*（意味の近似）→*apâtu*（numerous, teeming）

6 については TU_4→TÙ（同文字形）＝DU（同音異字）→DÙ＝*epēšu/epšetu/epištu*

(19) ^{d}TU.TU ^{d}ZI.KÙ *šal-šiš im-bu-ú mu-kil te-lil-ti* （15 番目）

「トゥトゥジク，（神々は）三度目に（こう）呼んだ。浄めの儀式を司るお方」

STC II, 51 ii（＝テクストは先の続きとなる。今後同様の場合にはテクスト名を略す）

8 ^{d}KIMIN.AN.NA ZI.KÙG.G[A]

9 DÙ *ba-nu-ú*

10 DÙ *ni-bu-ú*

11 ZI *ka-a-n*[*u*?]

12 KÙ *el-lu*

13 KÙ *te-lil-tu*$_4$

「コメント」

10 については DÙ（同音異字）→DU_{12}＝TUK＝*na-bu-ú-um* : *UET* 6, 379 10（*CAD* N/I 32 a）[8]

11 については $^{[zi-i]}$ZI＝ka-a-nu, $^{du-ur}$KU＝*ka*-[*a*]-*nu* Idu II 310（*CAD* K 159 b）

(20) *il*(DINGIR) *šá-a-ri ṭa-a-bi be-el taš-me-e u ma-ga-ri*

「麗しい風の神，傾聴と寛容の主」

14 DINGIR *i-lu*$_4$

15 ^{tu}TU_{15} *šá-a-ri*

16 ^{du}DU_{10} *ṭa-a-bu*

17 DINGIR *i-lu*$_4$

18 ZI *še-mu-ú*

8） 本稿では原則的に欧文引用文献の書名またはその略号をイタリック表記にしているが，*CAD* などに引用された例を表記する場合，原著の表記方法に従い，必ずしもイタリックとしない場合がある。

19　ZI　　*ma-ga-rù*

「コメント」

15 については KÙ(同音異字)→TU_{15}＝IM

18 については ZI(同音異字)→ZÌ＝ŠÈ(同音異字)→ŠE＝*še-mu-u*(*CAD* S/II 277 a)

19 については 18 を受けた上で ŠE ＝*še-m*[*u-ú*]，*magāru*（*CAD* M/I 34 b）

(21)　*mu-šab-ši ṣi-im-ri ku-bu-ut-te-e mu-kin* HÉ.GÁL

「豊かさと富とをもたらすお方，繁栄を確保してくださるお方」

20　ZI　　*ba-šu-ú*

21　KÙ　　*ṣi-im-ru*

22　KU_6　　*ku-bu-ut-te-e*

23　ZI　　*ka-a-n*[*u*]

24　[HÉ.GÁL?]　　*hé-g*[*ál-lu*]

「コメント」

20 については ZI＝*napištu*→(意味近似) *balāṭu*＝TI＝*ba-šu-u*（*CAD* B 144 b）

21－24 は難しいが考えられることは$^{šá-ar}$[ŠÁR]＝*ma-a-du* A V/2：51, Idu II 71；(*CAD* M/I 20 b)；　*mâdu*＝HI.A/HÁ(同音異字)→HA＝KU_6(同音異字)→KU：（意味近似)→*hegallu/kubuttu/ṣimru*

さて（22)-(36）については『注釈書』が欠損しているが，この部分について注釈が書かれていたことは間違いない。(37）の注釈を記述している *STC* II 60（K 8299 o.)＋51 iii のうち 51 iii については，先行する部分が大きく欠損しているが，タブレットの形態からここにおよそ 17 行が含まれていたことは確実だからである。現存する次の注釈は（37）以降に対応する。

(37)　*mu-kin puhru*(UKKIN) *ša* DINGIR.DINGIR[9] *mu-ṭib lib-bi-šu-un*

「神々の集会を確立し神々の心を安堵させるお方」

これは VII (35）に出てくる第 18 番目の名前 ^{d}ŠÀ.ZU についての説明文となる。

STC II 60（K 8299 o.)＋*STC* II 51 iii（ほぼ欠損）

1'　[　ZI?　　*ka-a-nu*?]

9）以下 *Ee* からの引用文に限って，DINGIR のみ D と略記する。

2' [ŠÀ? *pu-u*]*h-rù*

3' [DINGIR *i*]-*lu*$_4$

4' [ŠA$_6$? *ṭa-a*]-*bu*

5' [ŠÀ *lìb*]-*bi*

「コメント」

1'についてはZU（母音無視）→ZI : [zi-i]ZI＝*ka-a-nu* Idu I, 33

2'についてはŠÀ（心，中心，5'のコメント参照）から連想して「集まる」にこじ付けた後 *puhru* を引き出したのではないか？

4'についてはSA$_6$/ ŠA$_6$＝*damāqu*（意味近似）→*ṭâbu*

(38) *mu-kan-niš la ma-gi-ri ṣ*[*u-lu-ul*]*-šu-un ra-ap-šu*

「従わぬ者を服従させるお方，（神々の）おおいなる庇護！」

6' Z [I? *ka-n*]*a-šú*

7' ZI [*ma*]*-gi-ri*

8' ZU [*ṣu-l*]*u-lu*

9' ZU *ra-pa-šú*

「コメント」

6'についてはZI＝SÍ/SÉ→(同音異字) SI SI＝*ga-na-a-šu*（*CAD* K. 144 a）

7'－9'については根拠不明。cf. Bottéro 1977 : 21, 23

現存の『注釈書』はタブレット（39）に相当する注釈を落としている。*STC* II 51 ii（Sm. 11 ＋Sm. 980）とこれに併行する *STC* II 60（K. 8299 o.）とも，ZU : *ra-pa-šú*(VII 38の注釈）に続く行はZU : *sar-tu*$_4$(以下（40）参照）なのである。注釈が落ちた理由はまったく分らない。

(40) *šá sa-ar-ti u k*[*i-it*]*-tu*$_4$ *um-tas-sa-a aš-ru-uš-šu*

「彼のお方はそのましますところで偽りと真をはっきり区別なさる」

STC II 51 ii（Sm. 11 ＋ Sm. 980// *STC* II 60（K. 8299 o.）

5' ZU *sar-tu*$_4$

6' ZI *k*[*a*]*-a-n*[*u*]

7' ZU *m*[*u-u*]*s*!*-su-u*

8' ZI [*aš*]*-rù*

「コメント」

5'については根拠は不明。cf. Bottéro 1977 : 21, 23.

6'については（37）の注釈を参照。

7'については，ZU＝*idû/mudû* からかなり強引な意味の近似を適用したのではないか。（*mussu* : to distinguish/to identify）

8'については *ašru*＝KI（母音を無視）→KA＝ZÚ（母音を無視）→ZI

(41)　^{d}ŠÀ.ZU ^{d}ZI.SI *mu–še–ep–pi te–bi–i šá–niš lit–ta–'–i–du*　（19番目）

「シャズジシ，反乱者を沈黙させるお方。人々が（シャズの）2つ目の名を称え続けるように！」

STC II 51 iii＋*STC* II 60（K. 8299 o.）

9'　DINGIR. Š[À　　]　X [　]

この後『注釈書』は長い欠損部に入る。次に対応する注釈が見つかるのは以下からである。

(82)　^{d}A.GILIM.MA *šá–qu–ú na–si–ih a–gi–i a–šìr šal–gi*　（32番目）

「アギリンマ，高貴なお方，洪水を根絶するお方，降雪を制御されるお方」

STC II 54（K 4406）r. i

1　^{d}A.GILIM　MA

2　ÍL　　*šá–qu–*[*u*]

3　MA　　*na–sa–*[*hu*]

4　GILIM　　*a–gu–*[　]

5　GILIM　　*a– šá–*[*ru*]

6　GILIM　　*šal–*[*gú*]

7　*šàr a–gi–i*　*šar–ra–*[*hu*?]

「コメント」

2については，ÍL＝*našû* からの意味の連想。

3については，MAR＝GAR$^{MIN(=ga–ar)}$＝*na–sa–hu* Emesal v. III 80（MARのR音を無視）

4については，GILIM＝*kilīlu*（ティアラ）（意味の連想）→*agû*（冠）→アッカドの同音異議語 *agû*（wave, flood）＝A. GI$_{6}$. A，これはA.GI(LIM）の音に対応している。

その他の注釈について説明の根拠は不明。

(83)　*ba–nu–u* KI^{tim} *e–liš* A^{meš} *mu–kin e–la–a–ti*

「水の面に地を造ったお方，上方を固定したお方」

STC II 54 (K 4406) r. i

8 MA *ba-nu-u*

9 IM *er-ṣ[e-tu]*

10 DINGIR *e-[lu?]*

11 MU_9 *mu-u*

12 GI *ka-a-nu*

13 DINGIR *e-[la-a-ti?]*

「コメント」

8については，*BWL* p. 74に次のような記述がみられる（Theodocy l. 53についての「注釈」）。

[d]GAŠAN-ì-lí DÙ^{at} UN^{meš}// MA : DÙ^{u} ME : UN^{meš}

これを応用すればMAから*banû*を強引に引き出すことができる。

9については，$^{i-im}$IM＝*šá-mu-ú, er-ṣe-tú* Idu II 340 f (*CAD* E 308 a) がある。ただし同定の理由は不明。*šamû* と *erṣetu* とが対照的な対概念であるため，双方共に言及したものなのだろうか？一方 *CAD* E 303 a では IM : *er-[pe]-[tu]* STC 2 pl. 54 b r. i 9, Comm. to *ur-pe-e-ti* En. el. VII 83としている。なお Talon 2005 : 73では(variant) K : *ba-nu-ú ur-pe-e-ti* (K＝Ass. 11600 e, cf. p. xviii) とし，これを採用すれば文章の解釈は変わる。ただし，*STC* II pl. 54 b のコピーを見る限りでは，*er* の次の半分欠けた文字は *pe* ではなく *ṣe* に見える。

10, 13については，神が住む場所が上方（＝天）であるという連想から来ている。

11については，MA→MU＝*mu-u*　これは単なる機械的な音合わせと思われる（字形は MU_9＝GIŠ)。

(84) ^{d}ZU.LUM *mu-ad-di qer-bé-ti ana* D.D *pa-lik bi-nu-ti*　(33番目)

「ズルム，神々に耕作地を付与し，産物を分け与えるお方」

STC II 54 ＋*STC* II 55 (K 4406) r. i

14 ^{d}ZU [LUM]

15 ZU [*i-du-u*]

16 UL ÙL [*qer-be-e-tu*]

17 DINGIR [*a-na?*]

18 DINGIR [*i-lu_4*]

19 B[A?] [*pa-la-ku*]

20 UL [*bi-nu-tu?*]

「コメント」:『注釈書』ではアッカド語対応部分が完全に欠損している。復元は *Ee* の本文をもとにした推測である。

16については，$^{ul-ul}$KIB＝*qer-be-ti*　Ea IV 209 (ÙL＝KIB)

17については，AN→*ana*：単なる音合わせ。

19については，*CAD* P 49 b に従った。右側に *palāku* が入ることは，ほぼ間違いなかろう。一部が欠けている左側の文字が ZU である可能性は十分考えられるが，*palāku* との対応関係を見つけることは難しい。*CAD* P のように仮定すれば，$^{ba\text{-}ár}$BAR＝*palāhu*，*palāku*, *parāsu* A I/6：175 b であるから，BAR から R 音が落ちたと想像することは不可能ではない。

20については，解明困難。

(85)　*na-din is-qí u nin-da-bé-e pa-qí-du eš-re-ti*

「(神々の）取り分と供物を割り当て，聖堂の保護にあたるお方」

STC II 54 r. i 20 と 21 の間に分割線はないが，明らかに 21 以下がこの行の注釈である。

21　M[U?]　[*na-da-nu*?]

22　B[A]　[*is-qu*]

23　ZI　ZÌ　[*nin-da-bu-u*]

24　D[INGIR?　]

25　S[Ì　*pa-qa-du*?]

「コメント」：ここでもアッカド語対応部分は欠損している。とりあえず復元部に関して：

22については，*isqu*(lot, share)＝GIŠ.ŠUB.BA $^{ba\text{-}ar}$BAR＝*z*[*i-i-tu*]，*is-qu* A I/6：289 f.

23については，ZÌ＝*qemû*（「麦の粉」から，それを材料に作る供物を連想して）→*nindabû*

25については，ZÍ（同音異文字）→ZI＝SÍ（同音異文字）→SÌ＝SUM＝*paqādu*

(86)　^{d}*Mu-um-mu ba-an* AN^{e} u KI^{tim} *mu-še-šir pàr-si*

「ムンム，天と地の創造主，……を真っ直ぐに／統制するお方」[10]　（34番目）

26　UL　[　]

27　MU.UM.M[U]　[　]

28　DI[NGIR]　[　]

29　MU.UM.M[U]　[　]

以下欠損。

ここからまた注釈の欠損部に入る。次に対応する注釈が現れるのは（91）以降である。

10）この文の訳は難しい。Talon 2005 の訳は "Mummu, créateur du ciel et de la terre, qui met en ordre." だが *parāsu* が，どのような意味で使われているのか明確ではない。

(91) ^{d}LUGAL.ÁB.DU$_{10}$.BÙR LUGAL *sa-pi-ih ep-šet Ti-amat na-si-hu* ^{giš}*kakki*(TUKUL)-[*šá*] (34番目)

「ルガルアブドゥブル，ティアマトの行為を蹴散らし，その武器を取り除いたお方」

K 11169 ii (*RA* 17, 1920, 169)

1' [LUGAL *šarru*]
2' B[ÍR *sa-pa-hu*?]
3' DU DÙ *e*[*p-še-tu*]
4' AB *tam-tim*
5' BU *na-sa-hu*
6' DU DÙ *kak-*[*ku*]

「コメント」

2'については，BÙR（母音入れ替え）→BÍR（同音異字）→BIR：ところで $^{bi-ir}$BIR＝*sa-*[*pa-hu*] Ea V 101, etc. $^{ba-ar}$BAR＝*sa-*[*pa-hu*] *s*[*a*] A I/6：35 f.

3'については，DU$_{10}$（同音異字）→DÙ＝*epēšu*

4'については，ÁB（同音異字）→AB ところで ^{áb}AB＝*tam-tim* Ea IV 153, also wr.[*tam-t*]*um* A IV/3：86；^{ab}AB＝*tam-tum* Idu II 100, AB, A.AB.BA＝*tam-tum* Nabnitu IV 110 f.（*CAD* T 150 b）いずれにせよ *tâmtu*＝A.AB.BA からの応用であることは確かである。

5'については，DU$_{10}$.BÙR（音のみ利用）→DÙBUR＝BIR＝*sapāhu*（意味の連想／横滑り）→*nasāhu*

6'については，多分 DÙ＝KAK（音を利用）→*kakku*

(92) *šá ina re-e-ši ù ar-ka-ti du-ru-uš-šú ku-un-nu*

「その拠って立つところは前後とも堅固である」

7' LÚ [*šá-a*]
8' DIN[GIR] [ ]

「コメント」：『注釈書』は断片的な二行を残して欠損している。

(94) *šá ina* D.D *ahhe*(ŠEŠ)*-šú šur-bu-u e-tel nap-har-šú-un*

「兄弟である神々の中でとりわけ抜きんでいて，その全体の筆頭者！」

STC II, 54 (K 4406) r. ii

1 [ ] *i-na*
2 [DINGIR?] *i-lu*$_4$
3 [PA$_4$?] *a-hu*
4 [GAL?] *šu-ru-bu-u*

5　[GAL?]　*ra–bu–u*

6　[E]N?　*e–tel–lu*$_4$

7　[G]U?　*nap–ha–rù*

「コメント」：これは（93）に出てくる37番目の名前，^{d}PA$_4$.GAL.GÚ.EN.NAに関する「説明」となる。『注釈書』は右側のアッカド語欄のみが残り，左側［　］内は^{d}PA$_4$.GAL.GÚ.EN.NAから推測によって取り出した文字または音節である。

(95)　^{d}LUGAL.DUR.MAH *šar–ru mar–kas* D^{meš} *bēl*(EN) *dur–ma–hi*　（38番目）

「ルガルドゥルマフ，王，神々を結ぶ綱，ドゥルマフ綱の主」

8　LUGAL　DÚR.MAH

9　LUGAL　*šar–ru*

10　DÚR　*mar–ka–su*

11　DINGIR　*i–lu*$_4$

12　LUGAL　*be–lu*$_4$

13　DÚR. MAH　*dur–ma–hu*

「コメント」

10については，DUR＝*rakāsu*（意味の連想）→*markassu*：$^{du-ur}$DÚR＝*mar–kas*$_4$　2 R 47 iii 18（*CAD* M/I 282 b–83）.

(96)　*šá ina šu–bat* LUGAL–*ti šur–bu–u an ili*(D.D) *ma–'–diš ṣi–ru*

「王権の座において偉大で，どの神にもましてとりわけ崇高なお方」

14　LU　*šá–a*

15　DÚR　*i–na*

16　DÚR　*šub–tu*$_4$

17　LUGAL　*šar–ru*

18　MAH　*ru–bu–u*

19　DÚR　*a–na*

20　DINGIR　*i–lu*$_4$

21　MAH　*ma–'–du*

22　MAH　*ṣi–i–ri*

「コメント」

15については，DÚR（同字形）→ŠÈ＝*a–na*：19行の解釈はこれにこじつけたようである。*ana/*

ina は意味は異なるが，前置詞として同じように使われるので同定したのではないか。

16 については，DUR（同音異字）→DÚR＝(*w*)*ašābu*（名詞を派生させて）→*šubtu*

21 の MAH については 意味の連想による。他にも例はある：MAH＝*ma-a-du* S^a Voc. AA 27'

(97) ^{d}A.RÁ.NUN.NA *ma-lik* ^{d}*É-a ba-an* $D^{meš}$ $AD^{meš}$-[*šú*] （39 番目）

「アラヌンナ，エアの顧問，その父祖である神々の創造主」

23 ^{d}A.RÁ. NUN.NA

24 A.RÁ *mil-ku*

25 NUN ^{d}*É-a*

26 RU RÚ *ba-nu-u*

27 DINGIR *i-lu*$_4$

28 A *a-bu*

「コメント」

24 については，他にも占星テクストの『注釈書』に A.RÁ *mil-ku* ŠU *mil-ku* ŠU *ṭè-e-mu*（K. 5908：4'，*CAD* M/II 67 a）

26 については，RÁ（母音無視）→RÚ＝DÙ＝*banû*

(98) *šá a-na a-lak-ti ru-bu-ti-šú la ú-maš-šá-lu* D *a-a-um-ma*

「その君主としての振る舞いにおいて，いかなる神も比肩することがないお方」

29 RA *šá-a*

30 RA *a-na*

31 A[.R]Á *a-lak-tu*

32 N[UN] [*ru*?]-*bu-u*

33 NU [*l*]*a-a*

34 RÚ [*ma-sa-lu*?]

35 DI[NGIR] [*i-lu*$_4$]

36 [ ] [ ]

「コメント」

31 については，A.RÁ＝*alaktu*

29－30 については根拠は不明，34 以降は欠損部に入る。

(102) *be-lu*$_4$ *e-muq* ^{d}*A-num šá šu-tu-ru ni-bu-ut An-šár*

「主，アヌの力，アンシャル（から？）の命名においてとりわけ偉大なお方」

ごく一部についての注釈が残っている。

K. 13614（＝*CT* 19, 6）

1'　[　　] [*n*] *i*?-*b*[*u*?]

2'　[　　] AN-[⌜*šar*?]

「コメント」：欠損が大きいのでコメントは不可能。

(103)　^{d}IR.UG$_5$.GA *šá-lil gim-ri-šú-nu qer-biš Ti-amat*　(42番目)

「イルウッガ，彼等全体をティアマトの内から奪い取ったお方」

3'　[^{d}]IR　　Ú.G[A]

4'　IR　　*šá-la-l*[*u*$_4$]

5'　[G]I　　*gim-ri*

6'　[IR$_5$?]　　*qe-re-bu*

7'　[　　]　　*tam-tim*

「コメント」

5'についてはGA（母音無視）→GI：[$^{si-i}$] [GI]＝[*gim*]-*rum* *CT* 12 29 BM 38266 i 7.

6'については（128, 129）の『注釈』参照。

(104)　*šá nap-har uz-ni ih-mu-mu ha-si-sa pal-ki*

「すべての聞く耳を一身に取り入れたお方，その知恵は大きい」

7'　[GÚ]　　*nap-ha-ru*

8'　[GE$_{14}$?]　*uz-nu*

9'　[UR$_4$?]　[*ha-ma*]-*mu*

10'　GI?　　*ha-si-su*?

11'　GI?　　*pal-ku*

「コメント」

7'については，$^{gu-u}$GÚ＝*nap-ha-rum* A VIII/I：64, GÚ＝*nap-ha-rum* Nabnitu O 288, etc.

8' 10'については（117）のコメント参照。

9'については，^{ur}UR$_4$＝*ha-ma-mu, e-ṣe-ru* Sb II 269 f., etc.

10'以降『注釈書』は欠損。

(107)　^{d}KIN.MA *mu-ma-'-ir naphar ili*(D.D) *na-din mil-ki*（44番目）

「キンマ，全ての神々を統治するお方，助言を与えるお方」

STC II, 54, 82－3－23, 151 r. 1（*STC* II K. 4406 r. iii と連結する可能性がある）

x＋1 ^{d}[KIN.MA]

これに続くおよそ5行が欠損している。

(108) *šá a–na šu–me–šú* D^{meš} *kīma*(GIM) *me–he–e i–šub–bu pal–hiš*

「その御名（を聞くと）神々は嵐……のように恐ろしげに震える」[11)]

STC II, 54 + 55, K. 4406 r. iii

x'＋1	[	]x
x'＋2	[MU?	*šu–m*]*u*?
x'＋3	[DINGIR	*i–l*]*u*
x'＋4	[	*ki–m*]*a*
x'＋5	[IM?	*me–hu*]*–u*
x'＋6	[*me–hu–u*	*ša–a*]*–ru*
x'＋7	[	*ša*]*–a–bu*
x'＋8	[	*pa*]*l–hiš*
x'＋9	[ ]	MIN?

左側に入るはずののシュメール文字が欠損しているため，コメントは不可能。

(109) ^{d}É.SISKUR$_x$ *šá–qiš ina* É *ik–ri–bu li–šib–ma* （45番目）

「エシスクル，祈りの館に彼のお方が気高く鎮座しますように！」

x'＋10	[ ]	SISKUR$_x$
x'＋11	È	*šá–qu–u*
x'＋12	RA	*i–na*
x'＋13	É	*bi–i–tú*
x'＋14	SISKUR$_x$	*ik–ri–bu*
x'＋15	RA	*ra–mu–u*
x'＋16	RA	*a–šá–bu*

「コメント」

x'＋11については，È＝(*w*)*aṣû* からの連想また意味の展開。

---

11) 訳文は難しい。次のように語を補う考え方もある：*CAD* Š/I 18 a–b : *šá ana šumi–šu ilû kīma* ⟨*qanê*⟩ *mehê i–šub–bu palhiš* "at whose name the gods tremble fearfully like a reed in a violent storm"

いずれにせよ Talon 2005 : 74 のように *i–ru–bu* と翻字することには賛成しかねる。

x'＋15については，SISKURからR(A)音を取り出し，母音入れ替でRI＝*ramû*

x'＋16については，*ramû*と（*w*)*ašābu*との意味の近似による。

(110)　*ilû*(D.D) *mah–ri–šú li–še–ri–bu kàd–ra–šú–un*

「神々がそのおん前に捧げ物を持ち込むように!」

x'＋17　DINGIR　　*i–lu*$_4$

x'＋18　S]I$_{17}$　　*mah–ru*

x'＋19　GU]R$_8$　　*e–re–bu*

x'＋20　[　　]　　*kàd–ru–u*

「コメント」

x'＋18については，SI$_{17}$＝IGI＝*mahru*

x'＋19については，GUR$_8$＝TU＝KU$_4$＝*erēbu*

(111)　*a–di i–rib–šú–nu i–mah–ha–ru–ni*

「彼ら（＝神々）がその収入を受け取る限りは」

x'＋21　[　　]　　*a–di*

x'＋22　[　　]　　*ir–bu*

（以下欠損）

「コメント」

x'＋21について考えられることは，DINGIR（意味の連想)→EN＝*adi*

(112)　*ma–am–man ina ba–li–šú la i–ban–na–a nik–la–a–te*

「彼のお方のほかに誰も（あのような）傑作を作ることはない」

STC II 59, K. 2053 r. i

x＋1　[　　]

x＋2　RA　[　　]

x＋3？　[　　]

x＋4？　RU　RÚ　[*ba–nu–u*?]

x＋5　RU　RÚ　[*na–ku–lu*?]

欠損が激しくコメントは不可能。x＋4?，x＋5については（116）への注釈を参照。

(113)　*er–ba ṣal–mat qaqqadi*(SAG.DU) *bi–na–tuš–šú*

「四（界）の人間は彼のお方被創造物」

STC II 52 r. i ＋*STC* II 59, K. 2053 r. i

x＋1 [ES??]

x＋2 *er–bu* [ ]

x＋3 R[I?]

x＋4 RÚ [ ]

「コメント」

x＋2について *CAD* K 331 a は *er–bu–*[*u*]＝*kib–ra–a–te*(K. 2053) と記しているが，根拠は私にはわからない。

(114) *e–la šá–a–šú ṭè–mi* u_4*–me–ši–na la i–ad–da* D *ma–am–man*

「彼のお方のほかには，いかなる神も彼ら（人々）の寿命を知らない」

x＋5 E_{11}[*e–lu–u*?]

x＋6 R[A *šu–ú*?]

x＋7 KU! [*ṭe–e–mu*?]

x＋8 U_4 [u_4*–mu*]

x＋9 RA [*la–a*]

x＋10 ZU [*i–du–u*]

x＋11 DINGIR [*i–*lu_4]

x＋12 ZU *m*[*am–man*?]

「コメント」

欠損部が大きくコメントは困難だが，x＋7では恐らくKU音を取り出し，字形がおなじTÚG/UMUŠ＝*ṭēmu* としたのであろう。またx＋5では E_{11}＝DU_6.DU＝*elû*（＝to go up：動詞）から，アッカド語で音が似ていることのみを利用し前置詞 *ela* にこじつけた可能性がある。x＋12については *CAD* M/I 198 b 参照。

(115) ^{d}GIBIL$_6$ *mu–kin a–ṣa–at* ^{d}*kakki*(TUKUL) (46番目)

「ギビル，武器の成果（？？）を確かにするお方」[12)]

STC II 52 r. i

x＋13 ^{d}GIB[IL$_6$]

---

12) この行の訳に関して *CAD* A/II 356 a は次のようにコメントしている：*āṣītu*＜*aṣû* pl. *aṣâtu*: The passage *Girru mukin* ... (Ee VII 115) remains obscure:

x＋14　GI　　[*ka-a-nu*]
x＋15　RU　R[Ú]　[*a-ṣu-u*?]
x＋16　[x]　　[　　]

「コメント」

ここでは GIBIL$_6$=*girru* であることから，後者の音を適宜音節に分解し利用している。

x＋15 については，RÚ＝DÙ→(同音異字) DU＝TÙ→TÚ＝ÚD. ところで ÚD.DU＝È＝(*w*)*aṣû* ではないだろうか。

(116)　*šá ina tahāzi*(MÈ) *Ti-amat i-ban-na-a nik-la-a-te*

「ティアマトとの戦いの中から傑作を創り出したお方」

STC II 52 ＋*STC* II 53 r. i

x＋17　[L]Ú　　[*šá-a*]
x＋18　RA　　*i*-[*na*]
x＋19　IR　　[*ta-ha-zu*]
x＋20　RÚM.MA　　*t*[*am-tim*]
x＋21　RU　RÚ　　*b*[*a-nu-u*]
x＋22　RU　RÚ　　*n*[*a-ka-lu*]

「コメント」：字形上 RÚM＝NE. RU であることを利用している。

x＋19 については，IR＝*šalālu* →*tahāzu*（意味の横滑り）

x＋20 については，MA（母音無視)→MU（単なる音合わせ)→*mu*（水）

x＋21 については RÚ＝DÙ＝*banû*：x＋22 では上の行の *banû* から意味横滑りで→*nakālu*（to be skillfull). 同音の形容詞 *banû*（well formed, well made）の意味を重ねた可能性がある。

(117)　*pal-ka uz-ni it-pe-šá ha-si-sa*

「広い理解力を備え，賢く，知恵深い（お方)」

STC II 53 r. i ＋*STC* II 52 ＋*STC* II 57 r. i

x＋22　GI　　*p*[*a-al-ku*]
x＋23　GI　　*u*[*z-nu*]
x＋24　RU RÚ　*e*-[*pe-šu*?]
x＋25　GI　　*h*[*a-si-su*]

「コメント」GIBIL$_6$=*girru* を利用している。

x＋22 については，*girru* から単純に音を抽出：GI→GÍ＝KID→(母音無視) KUD＝*palku*

$^{ta-ár}$KUD＝*pa-a*[*l-k*]*u, na*-[*pal*]*-ku, šu*-[*pal*]*-ku*　A III/ 5 : 141 f（*CAD* P 67 a)

x＋23については，GI（同音）→GE_4＝*uznu*　A II/4：CT 12, 1：12

x＋25については，x＋23から*uznu*が引き出せたことを受け，同義で→*hasīsu*

(118)　*lìb-bi ru-ú-qa šá la i-lam-ma-du ilû*(D.D) *gim-ras-su-un*

「(その）奥深い心はすべての神々（にとっても）知ることはできない」

x＋26　IR　X[＝*lìb-bu*??]

x＋27　IR　[　]

x＋28　RA　[*šá-a*]

x＋29　RA　[la-a]

x＋30　NI　[*la-ma-du*]

x＋31　[　]

x＋32　[　]

「コメント」

x＋26については，*girru*からGIR音を抽出。GIR＝PIŠ/PEŠ：$^{pe-eš}$PEŠ＝*lib-bu* Idu II 129

x＋30については，NI＝Ì（同音）→I_5＝KA＝ZÚ（同音）→ZU＝*lamādu*

$^{zu-u}$zu＝*la-ma-a-du*　MSL 2 p. 132 vii 38 etc.

(119)　^{d}AD.DU *lu-ú* MU-*šú kiš-šat šamê*(AN)^{e} *li-rim-ma*　　(47番目)

「アッドゥがその御名であり，天をあまねく覆うように！」

STC II 57 r. i には x＋35 に ^{d}X のみ残存し，あとは欠損している。

(120)　*ṭa-a-bu rig-ma-šú eli*(UGU) *erṣetim*(KI)^{tim} *li-ir-ta-ṣi-in*

「彼のお方の恵みに満ちた轟が大地に鳴りひびくように」

STC II 54, 82－3－23, 151

数行の欠損ののち（x＋1）となる行の痕跡がわずかに認められる。

(121 a)　*mu-um-mu er-pe-e-ti liš-tak-ṣi-ba-am-ma*

「雷雲の轟が最高潮に達し，」

STC II 54, 82－3－23, 151

x＋2　[*mu*]-*um-mu*

x＋3　[Addu] *er-pe-e-tú*

x＋4　[DU?] *ma-lu-u*

x＋5　[　] *ka-ṣi-bu*

「コメント」：この部分の注釈では ^{d}AD.DU＝Adad＝^{d}IM が利用されている。

x＋3については，*erpetu*(cloud)＝IM.DIRIであり，^{d}IM＝Adad/Addu

x＋4については，DU→DÙ：$^{du\text{-}u}$DÙ＝*ma-lu-*[*u*]　Idu II, 232

x＋5については，左側のシュメール文字は不明だが：*kaṣābu*：to rainは*zannu*と同義。ところでIM＝[*za*]*-na-*[*nu*]　Recip. Ea A iv 35 etc.

(121 b)　*šap-liš a-na nišē*(UN)^{meš} *te-'u-ú-ta lid-din*

「下界で人々に食料を供給することになるように！」

x＋6　[DU?]　*ni-ši*

x＋7　[DU?]　*ti-i-u-tú*

x＋8　[DU?]　*na-da-nu*

「コメント」

x＋6にDUが想定されるのは，*nišū*＝UN/UG^{meš} UG→UG$_4$＝UD/TÚ→TÙ＝DU

x＋7にDUが想定されるのは，NÍG＝NÌ, SI＝ŠÍゆえにNÍG^{ni}.SI→NÌ.ŠI　Antagal G 145 f.（音のみ取り出すと）→*ni-ši*→DU（前行参照）

(122)　^{d}*A-šá-ru šá ki-ma šu-mi-šú-ma i-šu-ru* D^{meš} *šīmāti*(NAM)^{meš}（48番目）

「アシャル，その名のごとく運命の神々を統率するお方」

x＋9　[*ašāru/ešēru*?]　[A].RU

x＋10　[RA?]　[*š*]*á-a*

x＋11　[　]　[*k*]*i-ma*

以下欠損

「コメント」

x＋9については，単純にに音のみを取り出し同定。

(126)　^{d}NÉ.BÉ.RU *kakkabi*(MUL)*-šú šá ina šamê*(AN)^{e} *ú-šá-pu-u*

「ネベルは彼のお方が天に輝かせたその星」

STC II 52 r. ii

1'　[^{d}NÉ.　BÉ].R[U]

2'　[DINGIR]　*kak-k*[*a-b*]*u*

3'　[　R]A　*šá-*[*a*]

4'　[　RA　*i-na*

5'　DINGIR　*šá-me-e*

6'　E$_{11}$(＝DU$_6$.DU)　*šu-pu-u*

「コメント」：(124) の 49 番目の名 ^{d}NÉ.BÉ.RU の続きとなる。

6 ' については，È(＝UD.DU)＝*up-pu-u*, ^{e}DU$_{6}$.DU＝*up-pu-ú-um* MSL 2 133 viii 45 (Proto-Ea)。その他の行ではごく常識的な同定が行われている。

(127) *lu-ú ṣa-bit kun-sag-gi šu-nu ša-a-šu lu-ú pal-su-šú*

「彼のお方こそ（天の）交差点を司るお方。人々はただそれを見つめるだけ」

7 '	RA	*lu-ú*
8 '	RA	*ṣa-ba-tu*
9 '	[K]UN.SAG.GA	*re-e-šú ár-kàt*
10'	DINGIR	*re-e-šú*
11'	RU	*ár-kàt*
12'	[RA] *šá-a*	RU : *pa-la-su*

「コメント」

8 ' については，RU(母音無視)→RÁ＝ KU$_{4}$→KU : $^{da-ab}$KU＝*ṣa-ba-tu* etc. (*CAD* Ṣ 6 a)

9 ' については，SAG＝*rēšu* : KUN＝*zibbatu* (tail, rear part)（意味近似)→*arkâtu*

10' については意味の連想。

11' については RU＝ŠUB＝*maqātu* : おそらくは意味上のイメージをこじつけて→*arkâtu*

12' の後半については，^{igi}IGI＝*a-ma-ru*, *nap-lu-su*, [*n*]*a-ta-lu* であり，*natālu*＝ŠI（同音)→ŠÍ（同字形)＝SI（同音)→SI$_{7}$（同字形)＝DÈ（母音無視)→DÙ（同字形)＝RÚ（同音)→RU

(128) *ma-a šá qer-biš Ti-amat i-te-eb-bi-ru la na-hi-iš*

「(人々は言う)：彼のお方は休みなしにティアマトの内側を行き来しておられる」

13'	MA	*ma-a*
14'	MA	*ma-ru*
15'	RA	*šá-a*
16'	RA	*i-na*
17'	[I]R HAR	*qer-bu*
18'	RÚM/NE.RU	*tam-tim*
19'	BU	*e-be-rù*
20'	RA	*la-a*
21'	BI/NE	*na-a-h*[*u*]

「コメント」

13', 14' で MA の文字 / 音を取り上げている理由は不明。

17' については，NÉ.BÉ.RU から恣意的に ER/IR 音を取り出し，IR（同音）→IR_5＝HAR＝*šem/weru*（ring）（意味の連想）→*qerbu*

18' については，VII 132 についての注釈を参照。

19' については不明。21' については，VII (10) (11) についての注釈すなわち TÍ→TÉ→TE＝*na-a-hu* と同様である［松島 2009：46－47］。さらに TE（同音）→TE_4（同字形）→NE

(129)　*šum-šu lu-ú* ^{d}NÉ.BÉ.RU *a-hi-zu qer-bi-šu*

「その御名はまさにネベル，彼女（正しい人称代名詞は*ša*）の内部を掌握しているお方」

22'　BÍ　　*šu-uš-šú*

23'　RA　　*lu-ú*

24'　NÉ.BÉ.RU　NÉ.BÉ.RU

25'　RA　　*a-ha-zu*

26'　IR HAR　　*qer-bu*

「コメント」

22' についてはアッカド語文の*šum-šu*（m 音同化）：これをシュメール語で言い換えると mu-bi となる。（B. Foster (1993), p. 400 note 1, : from Sumerian mu-bi, its name）

25' については，RU を RA とし，母音無視で→RI : ^{ri}RI＝*a-ha-zu*　Ea II 295

(130)　*šá kakkabāni*(MUL)^{meš} *šá-ma-mi al-kàt-su-nu li-k*[*in*]*-ma*

「彼のお方が天の星々の軌道を確定なさるように」

27'　RA　　*šá-a*

28'　DINGIR　*kak-ka-bu*

29'　DINGIR　*šamê*(AN)^{e}

30'　RA　RÁ　*a-la-ku*

31'　MIN RÁ　*ka-a-nu*

「コメント」

30', 31' については，RA→RÁ＝DU/GUB

(131)　*ki-ma ṣe-e-ni li-ir-'-a* D.D *gim-ra-šú-un*

「彼のお方が神々すべてを家畜のように牧者として養うように」

32'　IR_5（＝HAR）　*ki-ma*

33'　RI　　*ṣe-e-nu*

34'　RI　　*re-'-u*

35' DINGIR *i-lu*$_4$

36' IR$_5$(=HAR) *lìb-b*

37' ŠÀ *lìb-bi*

38' ŠÀ *pu-uh-rù*

「コメント」

32' については難しいが，考えられる可能性は，*kīma*=GIM→GIM$_6$=DU=IR$_{10}$→IR$_5$

33' についても難しい。考えられるのは，RI→RI$_8$=LAGAB : LAGAB×SUM.ZIB=U$_8$=*ṣēnu*

34' については多分単なる音の近似。

36' については，(129) のコメント 26' からさらに連想して *libbu* を引き出したのか？ cf. *qi-rib*// *lìb-bi BWL* p. 76 : 82 (com.)

38' については，37' から連想したか，あるいはこじつけであろう[13)]。

(132) *li-ik-mi Ti-amat na-piš-ta-šu li-siq u li-ik-ri*

「彼のお方がティアマトを縛りあげ，息の根を止め断ち切るように」

STC II 53 r. ii

39' IR *ka-mu-u*

40' NE.RU *tam-tim*

41' IR *ši*-x[ ]

42' ŠI *na-p*[*iš-tú*?]

43' RIM *sa*-[*a-qu*]

44' RIM *k*[*u-ru-ú*?]

「コメント」

39' については，IR=*šalālu*（意味の連想）→*kamû*

40' については，ティアマトがマルドゥクにとって最大の敵ゆえに，[E]RIM→Tiamat : ne$^{e\text{-}rim}$ru= *a-a-bi* etc. Erimhuš VI 61 ff.

41' については，IR がシュメール語の Dat. -Postp.（ Borger, *Mes. Zeich. lexikon* p. 614）であることが理由である。

42' については，ŠI（同音）→ŠÍ=SI（同音）→SÍ=ZI=*napištu*

43' についてはやや煩雑だが，RIM=LAGAB/LÚGUD : LÚGUD(.DA)=*karû*(v.)/*kurû*(adj.) :

---

13) Bottéro 1977 : 13, note 25 は次のように説明している：variante de texte "recu" : *puhru-šun* : au lieu de *gimru-šun* cf. VAT 14511, dans *LKU* p. 13 no. 38 r 1.

$^{lu\text{-}gu\text{-}ud}$LAGAB＝*ku–ru–ú*　A I/2：$^{lu\text{-}gu\text{-}ud}$LAGAB＝*ku–ru–ú–um* MSL 2 128 ii 8 etc.（*CAD* K 569 b）：44' については前行の注釈の続きで *sâqu//karû*（ほぼ同義）

(134)　*li–is–me–e la uk–ra–lu li–ri–ik a–na ṣa–a–ti*

「彼女（＝ティアマト）がとどめられることなく，遙か彼方に退くように」

STC II 57 r. i

1'　[　　] A? AN?

欠損が大きくコメントは不可能。

(135)　*áš–šú áš–ri ib–na–a ip–ti–qa dan–ni–na*

「彼のお方が（天）という場を作り地下世界を開かれたので」

2'　IR　　*šu–ú*

3'　DINGIR　　*áš–rù*

4'　*áš–ru*　　*ša–mu–ú*

5'　RU　RÚ　　*ba–nu–u*

6'　　RÚ　　*pa–ta–qu*

7'　　RU　　*dan–ni–ni*

8'　*dan–ni–nu*　　*erṣetim*(KI)^{tim}

「コメント」

3', 4' については，*CAD* A/II 454 b および同 459 a：*ašru* mng. 2 e)（a poetic word for heaven）．なお 2' については（132）参照。

7' については不明[14]。

(136)　^{d}EN.KUR.KUR *šum–su it–ta–bi a–bu* ^{d}*En–líl*

「エンクルクル（＝ベール・マターティ）：父エンリルは彼のお方の名をこう呼んだ」

9'　EN.KUR.KUR　MU–*šú*

10'　　MA　　*šu–mu*

11'　　MA　　*na–bu–u*

12'　EN.KUR.KUR　^{d}*En–líl*

---

14)　$^{hi\text{-}lib}$IGI.KUR＝*dan–ni–na*, $^{ga\text{-}an\text{-}zêr}$IGI.KUR.ZA＝^{d}*dan–ni–na* etc. *CAD* D 91 a が関わるかもしれない。

「コメント」

この部分に関しては，シュメール文字（または含まれる音節）をどのような基準で取り出したのか，まったくわからない。KUR＝*mâtu* から ma 音を取り出したのか？

10' については MA（母音無視）→MU＝*šumu* だが，11' については不明。

(137) *zik–ri* ^{d}*Í–gì–gì im–bu–u na–gab–šú–un*

「イギギたちも彼のお方の名をすべて呼んだ / イギギたち全員が彼のお方の名を呼んだ」

13' MA *zi–ri*

14' DINGIR ^{d}*Í–gì–gì*

15' MA *ni–bu*

16' UZU *nag–bu*

「コメント」

この部分に関しても左側の文字（または含まれる音節）を取り出した基準がわからない。*mâtu* の利用は考えられるにせよ，16' の UZU は不可解。同定は UZU＝AM＋BAD であり BAD＝*nagbu* であることに依拠しているのかもしれない。

(138) *iš–me–e–ma* ^{d}*É–a ka–bat–ta–šu it–ta–an–gi*

「これを聞いてエアは心を弾ませた」

17' [ ] *še–mu–u*

18' [ ] ^{d}[*É–a*]

19' [ ]X *k*[*a–ba–tu*?]

20' LI *ra–*[*–a–šú*]

21' LI *na–g*[*u–u*]

22' LI *he–l*[*u–u*]

「コメント」

この部分に関しても左側の文字（または含まれる音節）を取り出した基準がわからない。

20', 21', 22' については，22' の LI→LÍ＝NI $^{za-al}$NI＝*he–lu–u* A II/1 ii 16' *CAD* H 169 a：意味の近似から *rašû*，*nagû* が引き出されたのであろう。

(139) *ma–a ša ab–bé–*[*e*]*–šu ú–šar–ri–hu zi–kir–šu*

（エアの言葉）「その名前を彼の父祖たちが称賛したのだ（から）」

18' A *ma–*[*a*]

19' A *a–*[*bu*]

20'　MA　*šur–r*[*u*?–*hu*]

21'　MA　*zik*–[*ru*]

「コメント」

ここでも左側の文字（または含まれる音節）を取り出した基準がわからない。

18' については，A/A^{meš}*mû*（water）→（アッカド語の音のみを取り出し）*mā*

20' については$^{[ša-ar]}$[SAR]＝*šu–ur–ru–hum*(text–*rum*) Ea VIII 288 (*CAD* Š/I 37 a)

これ以降の『注釈書』は *Ee* VII 140 f. とまったく同文となる。

結　　語

以上『注釈書』の記述を提示しそこで使われている説明方法を分析してきたわけだが，その「法則」をあらため整理してみると次のようになる。

① *Ee* においては，50の名前の多くがシュメール文字の組み合わせまたは短い句であり，後半の説明文ではシュメール文字に対応するアッカド語の語彙が割り当てられている。『注釈書』の著者はシュメール文字の音節を時に恣意的に区切り，これを自由に利用している。

② アッカド語は母音を副次的に扱う傾向があるため，ある文字を同子音・異母音文字へ横滑りさせるテクニックが使われる。また有音子音と無音子音の区別はしばしば無視される。

③ 当該のシュメール文字の読みを，文字をしばしば別の読みに置き換え，本来は無関係な意味と結びつける。

④ 同音異文字を利用し，読みは同じだが異なる文字に横滑りさせ，その文字の意味に置き換える操作が行われる。③と④は多くの場合連動する。

⑤ シュメール文字に対応するアッカド語の語彙の同定は，当時の書記にとっての一般常識の範囲ばかりでなく，何らかの文献的根拠があれば最大限に利用した。「文字リスト」「辞 / 字書」「辞 / 字 / 事典」の類が自在に活用された。

⑥ 対応関係には「意味の近似性」も利用された。また，「近似性をきっかけとした意味の展開」もある。この展開はかなり自由に行われ広範囲におよんだ。

⑦ シュメール文字の読みとアッカド語彙の読みが近似のとき，それ利用した。

⑧ 元来は異なった出自の文字でも，ある時期から字形が同一または近似となったものがある場合に，対応関係をこじつけた。これはかなり緩やかな裁量のもとに行われた。

⑨ シュメール文字をアッカド語に読み替えた上で，対応したアッカド語の語彙を適宜音節に区切って利用するなど，音を使った理由付けも行われた。

⑩ アッカド語の「同音異義語」を利用して対応関係を引き出したと思われる例がある。

内容的にこれは松島 2009：43－44 に提示したものと同じで，あえて言えばより簡潔にまとめる結果となった。先の小論では⑨，⑩の例は示すことができなかったが，本稿では（91）（131）の注釈のように⑨の手法を利用した例，（41）の注釈のように⑩の手法を利用した例を検証することができた。

これらを概観すると，かなり無理をして対応関係を引き出したもの，「屁理屈」としか言いようがないものが相当に目立つ。注釈者が用いた強引な理屈の中には，本人にしか分らないものもあったかもしれない。「分かる者にしか分らない」というのは，学問的・合理的な態度ではない。だが，私はそこに，バビロニアの注釈文学を担った人々の知的好奇心を見いだしたいと思う。「トリック精神」ないしは「遊び心」とでも呼べるものである。彼等は文字を必死に覚え知識を積み重ねただけでなく，文字や言葉を分解したり，連想で結びつけたり，トリック装置を仕掛けて楽しんだりした。その中から唐突な理屈が作り出され，社会の様々な場面で時おり巧妙に利用された。バビロニアはわれわれが想像するより，はるかに複雑で，仕掛けの多い世界だったのかもしれない。

参 考 文 献

CAD: The Assyrian Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago, Chicago 1956 ～.

Catalogue (1987): *Catalogue of the Babylonian Tablets in the British Museum* vol. VII (Tablets from Sippar 2), London.

Catalogue (1988): vol. VIII (Tablets from Sippar 3), London.

CT: *Cuneiform Texts from Babylonian Tablets in the British Museum*, London 1986 ～.

STC II: L. W. King, *The Seven Tablets of Creation* vol. II, London, 1902.

Borger, R. (1956) *Die Inschriften Asarhaddons, Königs von Assyrien*, Graz.

Bottéro, J. (1977) Les noms de Marduk, l'écriture et la «logique» en Mésopotamie ancienne. In: M. de J. Ellis (ed.) *Ancient Near Eastern Studies in Memory of J. J. Finkelstein*, Conneticut, 5－28.

Foster, B. R. (1993) *Before the Muses, An Anthology of Akkadian Literature*, 2 vols. Maryland.

Frame, G. (1992) *Babylonia 689-627 B. C. A Poitical History*, Istanbul-Leiden.

Houston, S. D. (ed.) (2004) *The First Writing, Script Invention as History and Process*, Cambridge.

池田 潤 (2009) Early Japanese and Early Akkadian Writing Systems — A Contrastive Survey of "Kunogenesis." 前川（編）2009：1－9.

前川和也（編）(2009)『シリア・メソポタミア世界の文化接触：民族・文化・言語』（文部科学省研

究費補助金特定領域研究「セム系部族社会の形成」平成20年度研究集会報告）平成21年2月.

前川和也（2009）前3千年紀シュメール語彙リストとアッカド語世界　前川（編）2009：20－30.

松島英子（2008）マルドゥクの「50の名前」の意味について『オリエント』51（1），165－180.

松島英子（2009）二言語併用世界の文字トリック ――『エヌーマ・エリシュ』の注釈書：マルドゥクの「50の名前」を例に――　前川（編）2009：42－50.

Sanders, S. L.（ed.）（2005）*Margins of Writing, Origins of Culture, Oriental Institute Seminars* No. 2, Feb. 25－26（PDF）.

Talon, P.（2005）*The Standard Babylonian Creation Myth Enūma Eliš*, SAACT vol. V, Helsinki.

（法政大学キャリアデザイン学部）